

## 有賀郁敏先生，日暮雅夫先生の定年ご退職にあたって

産業社会学部長 黒田 学  
社会学研究科長 三笥 利幸

この度、有賀郁敏教授、日暮雅夫教授の定年ご退職を迎えるにあたり、産業社会学部・社会学研究科を代表して、挨拶をさせていただきます。

有賀先生は29年間（法学部での2年間を含めると31年間）、日暮先生は14年間、産業社会学部・大学院社会学研究科での教育・研究活動等を通じて立命館大学全体の教学発展に貢献され、多くの卒業生・修了生を社会に輩出してこられました。以下、それぞれの先生のご経歴を簡単に紹介させていただきます。

有賀先生は、余暇の社会史、近現代ドイツスポーツ史、アソシエーション論を専門とされ、ドイツの協会組織（Vereinswesen）に関する歴史社会学：19世紀ドイツの三月前期・1848/49年革命期及びドイツ国民国家形成期におけるトゥルネン協会の性格・機能分析、ドイツ社会国家・ナチズム統治下における余暇・スポーツ政策の歴史評価に関わる研究に従事されてきました。最新刊では、『スポーツの近現代—その診断と批判—』（ナカニシヤ出版、2023年3月）の編著者として、総勢18名の研究者による大著を編集され、歴史、社会、文化、科学等の位相からスポーツの諸相を考察、分析されています。有賀先生は、本書において「トゥルネン・スポーツ組織の歴史的 성격」（第2章）として、労働者トゥルネン・スポーツ運動の展開、ナチズムによる余暇・スポーツの組織化を論述されています。また、このような歴史研究に加えて、近年の東京オリンピック・パラリンピックに対する言及（「東京パラリンピックと新自由主義の奇妙なシンクロ」）、ロシアによるウクライナ軍事侵略に対して、「非ナチ化」の歴史的な意味を視点に、ロシアのウクライナ軍事侵略をスポーツと関連づけて深く考察されています（「ウクライナ危機とスポーツに関する省察—『非ナチ化』の教訓—」）。このような研究活動を通じて、学部のスポーツ社会専攻および大学院社会学研究科において、当該専門領域の研究を進展させ、若手研究者の育成にも尽力されました。

また、先生は、学部役職、全学役職を歴任され、数多くの貢献をなされました。まず、主な学部役職としては、産業社会学部企画委員長、副学部長、スポーツ社会専攻長を務められた後、2011年度から6カ年にわたり、産業社会学部長（社会学研究科長兼任）として、学部・研究科教学のためにご尽力頂きました。全学役職としては、学生部スポーツ強化対策室副室長、学生部副部长、学校法人立命館理事・評議員を歴任され、2017年度から2018年度には理事補佐・立命館大学副学長、2019年度には理事補佐・学長特別補佐の要職に就かれ、その深い見識から学園の民主的発展に貢献されました。

日暮先生は、思想史、哲学・倫理学、社会学を専門とされ、日本における批判的社会理論の構築に向けて、①ドイツ、アメリカ等における批判的社会理論の研究、②批判的社会理論の日本の状況と関連させての展開、③

社会文化研究という3つの観点から研究に従事されてきました。とりわけ、ドイツにおけるJ.ハーバーマス、A.ホネット、アメリカにおけるN.フレイザー、W.ブラウン等が形成する批判理論を分析・検討されてきました。特筆すべきは、ハーバーマスのコミュニケーション的行為論、ホネットの承認論にかかわるご研究で、先生はこの領域の研究を牽引する役割を果たされてきました。最新刊では、『『啓蒙の弁証法』を読む』（共著、岩波書店、2023年1月）において、『『啓蒙の弁証法』から新自由主義批判へ——アメリカ批判理論の展開』（第Ⅱ部Ⅲ）を執筆されています。そこにも表れているように、日暮先生の最近のご研究は、批判理論を積極的に取り入れながら新自由主義を批判していくという明確な方向性をお持ちです。また、このような研究活動に加え、立命館大学在職中には、コロンビア大学人文学部客員研究員（2013年9月～2014年8月）もつとめられました。さらに、カリフォルニア大学バークレー校客員研究員（2018年8月～2019年3月）としても研究に尽力され、その成果のひとつとして、カリフォルニア大学バークレー校のマーティン・ジェイ教授との共編著『アメリカ批判理論——新自由主義への応答』（見洋書房、2021年3月）を公刊なさっています。

学部役職では、2011年度から2012年度に現代社会専攻専攻長をつとめられ、現代社会専攻および学部・研究科教学の発展に貢献されました。

お二人の先生は、在籍された期間や専門領域が異なりますが、それぞれの専門性と研究を通じて、産業社会学部が掲げる「現代化・総合化・共同化」に基づく学部・大学院教学の中心として、その充実と発展にお力を傾注されました。今日の社会的諸課題に対する鋭い考察と言及は、現代社会へ警鐘をならすと共に、私たちの社会の目指すべき方向性を示唆されています。私たちは、先生方の研究と教育に貢献された足跡、学問に対する真摯な姿勢と識見から多くを学び、継承し発展させていくことこそが、後進である私たちの先生方に対する感謝の証となるものと考えます。先生方、長年にわたり本当にありがとうございました。心より感謝申し上げます。

最後になりましたが、有賀郁敏先生、日暮雅夫先生のますますのご活躍とご健康、ご多幸を心より祈念申し上げます。

2023年5月